

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 29 日現在

機関番号：33307

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370454

研究課題名(和文) 認知語用論の試み--ストーリー・エモーション・レトリックストラテジー

研究課題名(英文) Cognitive exploration of pragmatics: Story, emotion, and discourse strategy

研究代表者

宮浦 国江 (MIYAUURA, Kunie)

北陸学院大学・人間総合学部(幼児児童教育学科)・教授(移行)

研究者番号：50275111

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：語用論研究で定型表現の文法における役割に注目し、ことわざが単に慣習化した社会文化的パタンを示すだけでなく、コンストラクション・スキーマとしても機能していることを明らかにした。文副詞の分析にレトリックストラテジーの観点の有効であることが確認された。言語の創造的使用例としてN-proof語研究を行い、その分析にはブレンディング分析よりもストーリー的知識による分析が有効であることを示した。一見変則的に見えるが自然な表現として使われている[X is X is X]構文に着目し、そのエコロジカルニッチを探ると共にディスコースにおける詳細な用例分析を行い構文としての全体像を明確に示した。

研究成果の概要(英文)：Proverbs do not just express the conventionalized sociocultural patterns of experiences, but also function as a constructional schema, enabling the speaker to use them flexibly. Sentence adverbs were analyzable from the viewpoint of rhetoric strategy. "N-proof" words show high productivity, and it became clear that "child-proof" could be better analyzed based on story-like knowledge than blending theoretic analysis. The expression "freedom is freedom is freedom" seems to be anomalous, especially from foreign learners of English, but actually such [X is X is X] construction instances are quite frequently used as natural expressions. Following Taylor (2002), the ecological niche of this construction was explored. The [X is X is X] construction exhibits representative iconicity in that predication is made double sure, rather than being analyzed as Langacker's serial constructions. It was also made clear that the [X is X is X] construction plays a unique role in grammar and in discourse.

研究分野：英語学

キーワード：認知言語学 語用論 ストーリー的知識構造 エモーション レトリックストラテジー 定型表現

### 1. 研究開始当初の背景

ディスコースレベルでの言語事象分析に認知文法に立脚した分析が可能であり、定型表現の持つ役割が認識されるようになった。また知識構造のもつストーリー性、エモーションが概念化にもたらす影響も大きい。しかし、対人コミュニケーション場面におけるストラテジーについての研究はまだ十分とは言えない。

### 2. 研究の目的

本研究は、認知言語学の立場から語用論的課題に取り組み、日常言語の使用の実相を、認知能力を基盤に、「スキーマの具現化」「知識構造としてのストーリー」「エモーション」「レトリック・ストラテジー」を用いて明らかにすることを旨とする。また、言語使用に関わる文法知識の問題として語彙と文法規則の中間に位置する様々な定型表現や構文に注目し、その用例分析とともに言語コミュニケーションにおける役割を考察する。

### 3. 研究の方法

認知言語学の用法基盤モデルに立ち、文献精読に基づく理論的考察と言語データ収集等に基づく実証的研究を平行して行う。月例研究会で用例分析等を進め、学会発表し論文にまとめ、国内外の認知言語学研究者との意見交換の中で精緻化を図る。

### 4. 研究成果

認知文法では、語彙・句・イディオム・文からディスコースに至るまでの言語体系が統一的に[概念/型式]からなる記号的言語単位(構文文法でいうところのコンストラクション)によって構成され、言語知識はスキーマ的 特定の、単純 複雑の2つの軸にそって柔軟にシフトする形で構成され、モノ、事物等のカテゴリーと同様、言語カテゴリーもプロトタイプの 周辺のメンバーで構成されていると考える。また言語使用場面で人は一語一語を絞り出すように発話するわけではない。プレパッケージされた概念と一定の形式からなる多様な定型表現が、語や句より大きな単位の言語記号として機能する。本研究で定型表現に注目する理由はそこにある。

(1) 認知言語的文法観に立ち、言語単位としてのことわざに注目し、実形収集、分析考察を行い、ことわざの特色を詳述し、そのコンストラクション・スキーマとしての機能を明らかにした。まず、多くの場合単文で、日常生活のさまざまな出来事から抽出され慣習化した社会的文化的な出来事展開パターンを表すものと捉えた。重要な特徴として、ことわざの二重性を挙げた。即ち、出来事展開パターンを具体的レベルで表しつつ、一般化レベルも併せ持っているのである(GENERIC IS SPECIFIC「一般的は特定の」概念メタファ参照)。具体的レベルでは、経験に根ざすスト

ーリーの知識として豊かなイメージを伴い、感情移入もしやすい。また一般化レベルを介することで適用範囲が広がる。ほどよいレベルの具体性と抽象性を併せ持つことにより、記憶、想起で効力を発揮する。形式面では、定型通りの用法、即ち完全指定の言語単位としての用法から、一部改変や一部取り出しの用法、さらにはことわざを引用あるいは参照点として機能させ、否定形で用いたり言語形式の一部を固定させ、一部を入れ替え自由なスロットとして用いるなど、バリエーションが見られた。このように、ことわざがスロットをもつ言語記号として機能していること、言い換えればコンストラクション・スキーマとして文法内の他の言語記号と並行的に機能していることが確認された。

(2) 言語の創造的使用例としてN-proof語を取り上げた。まず、多義性を持つ語や合成語など創発的意味の分析にはブレンディング理論による分析が有効であることを示した。N-proof語の用例をコーパスを用いて収集し、上位100語4810例から69語4671例を対象とし、N-proof語が形容詞として機能することから[N<sub>1</sub>-proof N<sub>2</sub>]の具現形を取り出し、3タイプに分類した。Aタイプのbullet-proof vest型では、N<sub>1</sub>は外部からやって来る危険/害、N<sub>2</sub>はもし危険/害が及ぶと死に至る、あるいは正常に機能できなくなるという使用条件を満たす必要がある。Bタイプのleak-proof container型では、N<sub>1</sub>はN<sub>2</sub>に関する望ましくない事態、N<sub>2</sub>は何らかの望ましくない事態を被る可能性のある事物という使用条件を満たす必要がある。いずれのタイプもブレンディングによる分析が有効である。しかし、Cタイプのchild-proof bottle型のN-proof語は、二種に下位分類され、その意味論はブレンディングによる分析では不十分であり、経験、世界知識に基づき因果関係や事態の展開パターンなどに基づいたストーリー的知識による分析が有効であることが明らかとなった。まとめとして以下の3点を示した。(i) [N<sub>1</sub>-proof N<sub>2</sub>]の表すものは、人間及びN<sub>2</sub>についての(ストーリー的)知識に照らして、人間の生存・健康やN<sub>2</sub>本来の働きに問題を生じる可能性のあるN<sub>1</sub>(モノ・出来事)を防ぎ、人間の生存や本来の機能を全うすることを目的として設計/製作されたN<sub>2</sub>である、(ii) N<sub>2</sub>はすべて[-human]。人間及び人間社会についての知識は言語単位[N<sub>1</sub>-proof N<sub>2</sub>]の産出・理解に深く関わるが、N<sub>2</sub>として顕れることはない、(iii) [N<sub>1</sub>-proof N<sub>2</sub>]で何がN<sub>1</sub>、N<sub>2</sub>になるかは、日常経験・身体性に根ざしており、メタファ、メトニミと同様の原理が働くと考えられる。

(3) 構文レベルのテーマとして、一見非文法的と思われるが英語話者には自然な表現として容認されるfreedom is freedom is freedomのような文を取り上げた。用例収集、英語話者インタビュー等を行い、[X is X is X]構文と名付け、構文の形式と意味を明らか

にした。形式面では X には不定冠詞名詞句、無冠詞名詞句、定冠詞名詞句、固有名詞のいずれも可能であり、構文としての形式も述定の繰り返しがさらに多いものもある。構文の中心的な意味は「X とは、誰もが承知している通りの X であり、その意味するところに異論を挟む余地はない」というようなことであるが、X の時空を超えた恒常性を意味するなど多少の拡張が見られる。少例であるが複数形もあり X の多様性を示す場合と、構文の中心義で用いられる場合が混在する。またこの特異な構文がなぜ英語話者の頭の中で存在が許されているのか、英語文法全体の中で他のいかなる要素と関わりをもっているかを考察した。言い換えればこの構文のエコロジカル・ニッチ(Taylor 2002)を探求し、トートロジー、エモーションの度合いを反映する類像性、韻律の定着パターン、参照点連鎖、数式表現等の観点を整理した。この構文の先行研究は皆無に近いが、Langacker (2008/2011) は *day after day after day* 等を連続構文として分析する中で *a lie is a lie is a lie* を例文に含めている。しかし副詞句連鎖や目的語位置にある名詞句連鎖と [X is X is X] 構文を同等に扱うのはオンライン処理の点からも首肯しがたい。主題-評言 / 評言 / 評言として代案を提示した。さらにディコースにおける用例分析を行い、断言、引用、引用と疑問の延長上にある重要な用法としてカウンターディスコースとしての用法があることを指摘した。これは、ヘッジ表現として *That 's very true, but . . .* と自説の主張の前に相手の説を持ち上げる用例と同様の働きを持つ。このカウンターディスコースとしての用法はトートロジーとの差異を際立たせる。すなわち、トートロジーには話題を打ち切る機能があるが、この構文はむしろ自説に導くための表現であり、ここに [X is X is X] 構文の独自性があると言えよう。この構文の存在は、イディオムの表現が決して周辺的存在ではないと言う認知文法の主張を支持するものであり、一見非文に見えながらも文法内の言語単位として独自性をもって機能する点、エモーションやレトリックストラテジーの重要性を示す点で有意なものといえよう。またこのようなイディオムの定型表現が果たす役割に注視することは、5 文型など抽象度の高い理想形のみを英文法規則とみなしがちな外国語学習/教育にも示唆を与えるものであろう。

(4) 英語教育への応用面では、複数可算名詞を取り上げた。認知文法が明らかにした可算名詞と質量名詞の [有界 無界] と [内部異質性 内部均質性] による特徴付けは特にプロトタイプ的メンバーの説明には有効であるが、複数可算名詞が質量名詞の特徴を帯びることから以前から有効な説明が求められていた。形容詞とのコロケーション等も手がかりとしながら下位分類スキーマと共に示すことでこの課題に一定の解決が見ら

れた。

(5) 本研究期間中に前本務校での定年退職を迎え、「ことばの不思議・人間の不思議を追い続けて」と題して最終講義を行った。本研究の成果を取り入れて実例を示しつつ認知言語学の基本概念、意味拡張、ことばと世界、動的用法基盤モデル、ことばの創造性について述べたが、本研究のまとめの著書の大筋を得ることができた。

特徴的な成果は以上であるが、語用論的課題に対して、認知言語学の立場から「知識構造としてのストーリー」「エモーション」「レトリックストラテジー」を主要概念として日常言語の使用の実相を明らかにしていく見取り図ができ、その道筋に沿って体系の肉付けと精緻化を図ってきた。コロケーション、引用、クリシェ、小話、再話等、具体的事例の分析も月例研究会での発表を通して進め、著書としてまとめの段階である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

宮浦国江、文法における定型表現の役割：ことわざ(proverbs)の場合、日本認知言語学会論文集、査読有、Vol. 15、2015、pp.560-566

宮浦国江、N-proof 語の意味論：ブレンディングと「ストーリー」知識、日本認知言語学会論文集、査読有、Vol. 16、2015、pp.460-466

[学会発表](計 3 件)

宮浦国江、文法における定型表現の役割：ことわざ(proverbs)の場合、日本認知言語学会第15回全国大会、2014年9月20日-21日、慶応大学、

宮浦国江、N-proof 語の意味論：ブレンディングと「ストーリー」知識、日本認知言語学会第16回全国大会、2015年9月12日-13日、同志社大学

宮浦国江、Non-Canonical Constructions: the [X is X is X] Construction Revisited (変則的な文の位置づけ：[X is X is X] 構文再考)、第5回認知文法研究会、2016年3月16日、愛知県立大学

[図書](計 0 件)

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：

出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

宮浦国江 (MIYAURA, Kunie)  
北陸学院大学人間総合学部・教授  
研究者番号：50275111

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

##### (4) 研究協力者

( )